



ロリータ、わが人生の光、わが腰部の炎。わが罪、わが魂『ロリータ』(1955年)ウラジーミル・ナボコフ

背景

キーワード

禁制本

前史

1532年〜64年 フランソワ・ラブレーの『ガルガンチュアとパンタグリュエル』が、パリのソルボンヌ大学から卑猥だと非難される。

1759年 風刺的な内容のために政府と教会当局から発禁処分を受けたにもかかわらず、ヴォルテールの『カンディード』が大量に売れる。

1934年 ヘンリー・ミラーの『北回帰線』が、性描写を含むことからアメリカで発売禁止となる。

後史

1959年 薬物常習者が語り手であるウィリアム・バロウズの『裸のランチ』が、1962年にボストンで発禁処分を受けるが、決定は1966年に覆される。

1988年 サルマン・ラシュディの『悪魔の詩』が、イスラム教の神を冒瀆しているとされ、10か国以上で発禁処分となる。

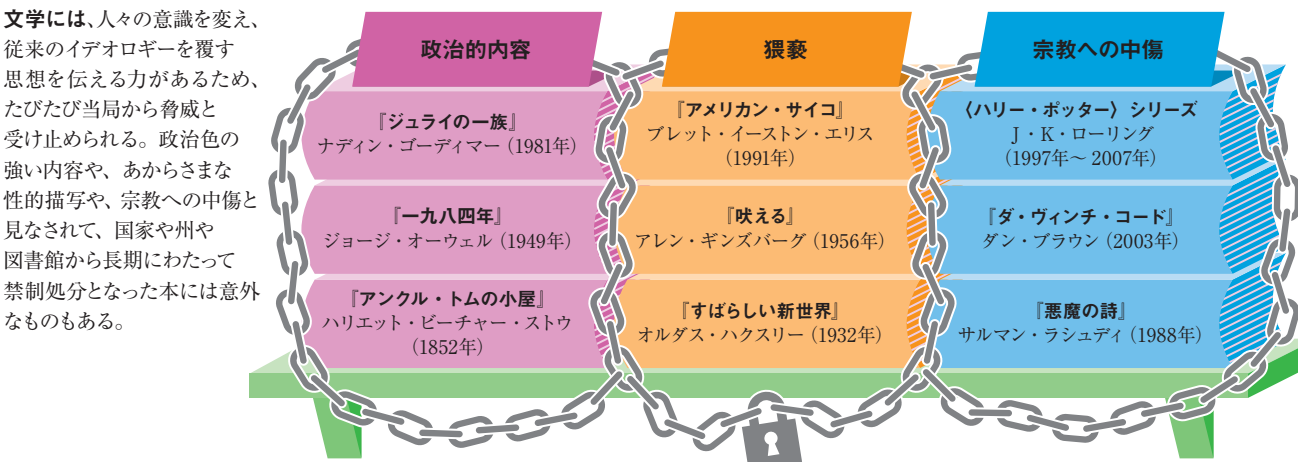
文学の歴史には、発禁や検閲処分を受けた本がたびたび登場する。20世紀前半には、文学の実験が嗜好の限界を押しひろげて、保守的な読者に衝撃を与えた。それに対して徹底した検閲がおこなわれ、たとえばアイルランドの作家ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』などから猥褻な表現を見つけ出し、イギリスの作家D・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』からは性的な描写を取り除いた。しかし1960年に無修正の『チャタレイ夫人の恋人』が裁判で無罪となってからは、イギリスのポルノグラフィー文学の出版規制は事実上廃止された。世界的に見ても書籍の検閲は緩和されたが、まだ完全撤廃には至っていない。

受け入れがたいことを受け入れるウラジーミル・ナボコフの問題小説『ロリータ』は、人々を魅了すると同時に攪乱する力をいまでも保っている。1955年にフランスで出版されたあとに発禁処分を受け、1959年にロンドンであらためて出版されたこの小説は、語り手のハンバート・ハンバートのある魅惑的な少女につ

いての妄想に基づいている。少女は9歳と14歳のあいだの思春期にあり、細身で絹のような肌を持った美形で、タイトルのロリータは、その後幼い妖婦を指す英語になった。『ロリータ』で、不穏な話に対する正常な反応をことごとく覆す語り手に共感するにつれ、読者は混乱する。ハンバートの閉鎖的な空想のなかで、謝罪の弁、文学作品の引用、ことば遊び、狡猾なウィットなどを交えた用意周到な防御が施され、読者は都会的なヨーロッパの教授に魅了されて判断力を失っていく。

妄想の呪縛フランスのリヴィエラに住む少年が少女アナベルに恋をした——これがハンバートの妄想の原型である。何年もあとにアメリカで「アナベルが別の少女に転生し」、彼は「その呪縛から解き放たれた」。それがドロレス・ヘイズ、つまりハンバートが下宿する家の女主人の12歳になる娘で、愛称ロリータである。衝撃的な事態が展開するのは、ハンバートが妄想の対象のロリータに近づこうと目論んで、その母親と結婚してからである。新

参照 『ガルガンチュアとパンタグリュエル』72-73 ■ 『ボヴァリー夫人』158-63 ■ 『ユリシーズ』214-21 ■ 『一九八四年』250-55 ■ 『ブリキの太鼓』270-71 ■ 『『吠える』ほか』288 ■ 『アメリカン・サイコ』313 ■ 『悪魔の詩』336



妻の殺害を企てる漠然とした計画は、妻が車に轢かれて無用となる。ハンバートは残された義父の立場で、サマーキャンプに参加していたドロレスを迎えにいき、自身の夢を実現する試みを開始する。

言語に恋して淫らな描写がほとんど見られない「エロティック小説」の第2部では、作者の真の恋愛関係——相手は言語——が語

られていく。きわめて精巧で、華麗かつ抒情的な散文体によって、ハンバートはドロレスとの1年にわたるアメリカ横断の旅をつなぎ合わせていく。幻想的、映画的な記述がつづくなかで、ハンバートのひとりよがりの情熱を傾けていく細部（口論、危機一髪の状態、機嫌とり）が断続的に浮かびあがる。1年後に東海岸にもどってドロレスを学校に入れると、ハンバートの幻想の枠組みが崩れはじめ

る。この作品の文体、構造、描写は通常のポルノグラフィー小説では見られないものである。ハンバート・ハンバートは究極の信頼できない語り手であり、話が始まる前から結末が未解決だと告げる架空の作家の序文によって守られている。ほかの説明はなく、擁護しがたいものを擁護するハンバートの死後の声だけが読者へ語りかけている。■

ウラジーミル・ナボコフ

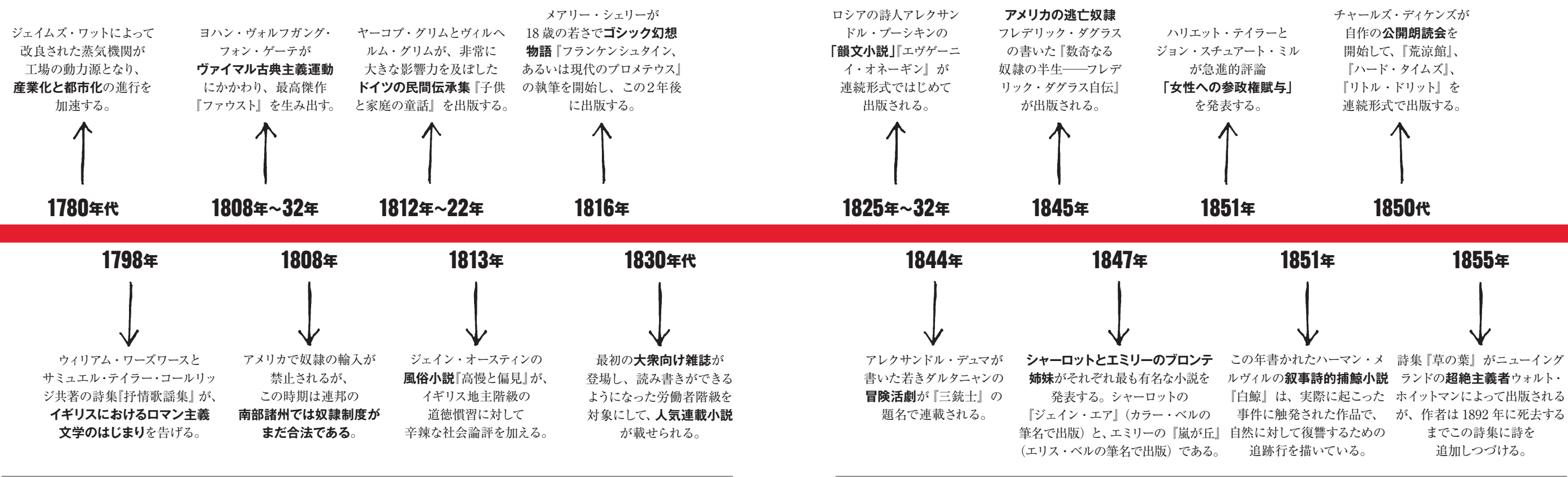
1899年4月、サンクトペテルブルクの貴族階級の一族に生まれたウラジーミル・ナボコフは、幼少時代をロシアで過ごし、成長するにつれ、英語、フランス語、ロシア語の3言語を自在に話すようになった。1917年のロシア革命のあと、1919年に一家でイギリスへ亡命し、ナボコフはケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジで学んだ。さらにベルリンへ移ったのち、ジャーナリストであり政治家でもある父親が政治集会で暗殺された。ベルリンとパリに住んでいるあいだ、テニスコーチ兼家庭教師として働くかわら、ロシア語で小説、短編、詩

などを執筆した。1925年にヴェラ・スロニムと結婚し、息子ドミトリをもうける。第2次世界大戦のさなかにアメリカへ逃れ、その後に英語で『ロリータ』を執筆。ウェルズリー大学やコーネル大学で教鞭を執り、さらには蝶研究の権威として、ハーヴァード大学比較動物学博物館で研究員をつとめた。1977年、スイスのモントルーにて死去した。

ほかの主要作品

1938年 『賜物』

1962年 『青白い炎』



18世紀後半はヨーロッパ全域に革命的変化が起こった時期だった。啓蒙主義は科学の進歩を促して産業革命をもたらし、それとともにさまざまな哲学思想を生み出して、そうした思想が北アメリカとフランスでの政治における大変革を引き起こした。産業化と都市化の進展が社会に及ぼした数々の影響は、多くの人々の生活様式と就労形態に重大な衝撃を与えた。

ルネサンスと啓蒙主義の時代には、人間と理性は切り離されずに一対となっていたが、19世紀前半には個人が前面に現れる。合理性に対する反動もあって、芸術の世界でひとつの運動が起こり、主観的な感性や心的能力が重視された。これがロマン主義の名で知られるようになった。

ロマン主義文学

ロマン主義の起源はシュトゥルム・ウント・ドラング運動にあり、ドイツで興ったこの運動からはゲーテとシラーという作家が現れた。啓蒙主義の古典様式から19世紀のロマン主義へのこの過渡期に、ゲーテとシラーは慣例にとらわれない主人公を登場させ、その行動よりも思考や感情に重きを置いた。「ロマン主義のヒーロー」と呼ばれるこうした人物像は、その時代の反抗心を典型的に示すものとなり、そのころ数を増しつつあった小説のなかに繰り返し登場した。19世紀半ばまでにロマン主義がヨーロッパ全域からロシアへ広まると、プーシキン、レールモントフ、トゥルゲーネフなどの作家は、この観念を発展させて「余計者」と

いう人物像を作り出し、型破りな考え方ゆえに社会から完全に孤立する主人公を登場させた。

ロマン主義文学のもうひとつの特徴は、自然界との親近性である。ワーズワースやコールリッジなどのイギリスの詩人が、産業化時代への対抗手段として自然の美と力を描き、幼少期の無垢と衝動を賛美した。都市化に対する似たような反動はアメリカの超絶主義作家の作品に顕著であり、エマソンやソローやホイットマンが博愛主義的な自由の精神を喚起して、自分たちの流儀で「自然に帰れ」という呼びかけをするに至った。

ゴシック小説

だがロマン主義作家の多くが気づいた

のは、自然が掻き立てる感情には喜びとともに恐怖もありうることだった。自然の破壊力に、そして超自然にさえも魅せられるこうした心情が、ゴシック文学として知られるジャンルを生み出した。その流れはドイツで定まり、ゲーテの戯曲『ファウスト』やホフマンの短編物語がその役割を果たしたが、最も熱心にこのジャンルを取り入れたのはイギリスの小説家たちであり、『フランケンシュタイン』を書いたメアリー・シェリーなどの例がある。ヴィクトリア朝の小説の多くにはゴシックの要素がちりばめられていて、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』にあるように、荒涼たる風景のなかで、主人公が具えた奔放な性質を強調する例がしばしば見られた。また、都会の陰惨な環境

に身を置く異様な人物を描く例も多く、これはディケンズの作品に特徴的に見てとれる。このジャンルはアメリカでも広まり、死をさまざまに描いたポーの物語がその例だった。また、表現様式にも影響を与え、メルヴィルは『白鯨』などの作品にそれを取り入れた。

歴史と自己認識

社会が産業化するにつれて読み書き能力の水準があがり、文学はもはや教育を受けた者の独占物ではなくなった。特に小説は19世紀のヨーロッパとアメリカで読者数が一気に増え、多くの作品が連続物の形式で刊行された。人気があったのは、スコット、デュマ、クーパーなどの作家が書いた歴史小説で、こうした作品

は派手な冒険物語を求める声に応えたものだったが、トルストイの『戦争と平和』のように、もっと深刻な内容の作品もあった。民話やおとぎ話も好まれたが、ある文化に特有のものであることが多かった。このため、地域特有の伝統に関心が集まり、当時強まってきた民族主義と同調した。

読者層のひろがりや識字率の向上によって、作者の顔ぶれは非常に多彩になった。その最も目につく例が多くの女性作家であり、イギリスのブロンテ姉妹やジョージ・エリオットらが文学に女性の視点を取りこむ先駆者となった。また、ダグラスやジェイコブズやノーザップなど、早い時期に自由の身になった元奴隷が、アメリカの抑圧された黒人に声を与えた。■



水たばこを吸う、ぶっさらばうなイモムシが、アリスの不安を増大させる。アリスは不思議の国のありさまに困惑し、「あんたはだれだい?」というイモムシの質問にも答えることができない。

な生き物が奇妙なふるまいをし、変な出来事がつぎつぎ起こり、ことばの法則も通常とは異なっている。それこそがこの物語の特徴であり、主題でもある。

アリス自身はこの異様な法則を受け入れている。ウサギの穴を落下しながら、アリスは「地球の"たんはい"側の点」にたどり着いてしまうのではと思いはじめ、ここはオーストラリアかニュージーランドですか、と尋ねる自分を想像する。そ



ハリー・ポッターにとって、死の影はつねに身近なものだ。ハリーは闇の陣営と戦うヒーローであり、その過程で生きるのに必要なことを学んでいく。

れにつづくアリスの考えは、キャロルが子供の無邪気さに精通していることを鮮やかに示している——「だめよ、そんなこと聞いちゃいけない。どっかに書いてあるのが見つかるかもしれないんだから」。

アリスはつねに考えつづける。自分はいったいだれなのか、この不思議な世界にはどんな法則があるのか、そしてどうすれば自分がまともな状態にもどれるのか、と。最初にアリスがとまどうのは、体が大きすぎたり小さすぎたり、したいことをするのに体の大きさが合わないことだった。イモムシに会ったあと、また別の不安が生じる。つっけんどんな調子で繰り返し否定されるという難題と直面することになったのだ。物語が終盤へ向かうにつれ、女王が首を刎ねろという命令を乱発するなど、暴力の気配が物語に緊迫感をもたらしていく。

規範からの逃避

アリスが作中で出会うのは多くが動物だ。冒険の前後に登場する姉とアリス自身を除けば、作中に登場する人間は、ハー

へえ！ ニヤニヤ笑いなしの猫ならよく見かけるけど、猫なしのニヤニヤ笑いなんて！生まれてからいままで、こんな変てこなもの、見たことがない！『不思議の国のアリス』

トの王と女王をトランプの札とすると、帽子屋と公爵夫人だけだ。

日常生活とは正反対の世界観は、旧習に従うことに慣れたヴィクトリア朝の大人にとっても解放的に見えたにちがいない。ナンセンスが人々を惹きつけるのは、ひとつには想像をふくらませる素地になるからであり、またおそらく、社会規範からしばし解放されたいという無意識の欲求を満たすからでもある。

アリスは物語が進むにつれて一段と率直になり、終盤の裁判の場面では、女王

ハリー・ポッター現象

J・K・ローリングによる、魔法使いの少年の冒険を描いた〈ハリー・ポッター〉シリーズ(1997年～2007年)は、子供の物語の力を証明した作品である。シリーズが社会現象となるほど大ヒットしたのは、成長物語や学園小説など複数のジャンルとファンタジーを巧みに融合し、さらに冒険小説やロマンスなどの要素を織り交ぜたことがひとつの要因である。ローリングは「死」がこの物語の重要なテーマであると公言していたが、そうした発言が作品全体に通じるおもしろおかしい雰囲気損なうこと

はなかった。このシリーズの出版計画は、実際の時間軸でハリーが年齢を重ねる設定となっていたので、出版当初の幼い読者たちは文字どおりハリーとともに成長することになり、特に深い読書体験を得ることになった。

子供に絶大な人気を誇るだけでなく、多くの大人の読者も惹きつけたこのシリーズは、著者に大きな富をもたらすことになった。2013年までの全7巻の総販売部数は4億5千万部を超えている。

のゆがんだ正義について「ばかばかしい！ナンセンスよ!」と、当人に対して言っている。そして、ふつうの子供の大きさにもどったアリスが最後にしたのは、トランプはただのトランプの札ではない——つまり、無生物である——と言いきることだった。そのことばが発せられると、トランプは宙へ舞いあがる。持ち前の性格を発揮し、アリスは幻想の世界を破裂させたのだった。

最終章は、アリスの姉を前面に出すことで、みごとに決着がつけられている。はじめは姉がアリスを愛おしげに見つめているだけだが、やがてアリスから聞いたばかりの奇妙な生き物たちが目の前を通り過ぎていく。そして最後に、姉の見たアリスは「大人の女性」になっていて、それでも子供のころからの「無邪気で愛に満ちた心」を忘れることなく、不思議の国の物語をつぎの世代へ語りついでいるのだった。

ナンセンスが意味するもの

この作品ほど感受性が豊かで、機知に富み、生き生きとしたファンタジーとなると、隠された意味についての数々の疑問も呼び起こす。たとえば、作中ではよく食べ物が不安をもたらすが、キャロル自身が摂食障害に苦しんでいたのではないかと考えられる。キャロルがオックスフォードで教えていた数学は古典的な分野であり、当時は抽象的な数学論が登場しはじめていたので、作中に奇妙な論理が出てくるのは新しい数学に対するあてつけや批判だという可能性もある。

たとえそのように個人的な含意があったとしても、アリスの冒険の普遍性が損なわれることはない。それは、この作品の基調にある子供の傷つきやすさという

テーマは、キャロルの時代だけでなく現代にも通じるものだからである。

キャロルは1871年に、アリスが登場するよく似た第2の物語を発表する。『鏡の国のアリス』だ。この物語にも、印象的なキャラクター(セイウチや大工、トウィードルダムとトウィードルディなど)が登場し、ナンセンスな詩や、あべこべな論理を楽しむ軽妙な格言が盛りこまれている。

ファンタジーの誘惑

この作品の影響は、J・R・R・トールキンの『ホビットの冒険』やC・S・ルイスの〈ナルニア国物語〉シリーズでの不思議の国の変貌や、ドクター・スースの気まぐれな韻文の世界、ロアルド・ダールの『チョコレート工場の秘密』、そしてJ・K・ローリングが描く魔法使いの学校ホグワーツにまで見られる。21世紀にはリアリズムの新たな動きが児童文学の分野でも見られるが、いままファンタジー小説は幼い心を強く揺さぶっている。■



ハンプティ・ダンプティとの会話には、ほかのキャラクターとの会話と同じく、さもともとだと言わんばかりに、なぜなぜやことば遊び、そしてたらめな論理が入り混じる。



ルイス・キャロル

1832年、イギリスのチェシャーに生まれたチャールズ・ドジソン(ペンネームであるルイス・キャロルのほうがよく知られる)は、牧師の息子だった。オックスフォード大学のクライスト・チャーチ・カレッジの数学学部を首席で卒業し、1855年から生涯にわたって同校で教鞭をとりつづけた。聖職にも叙任されている。作品が最初に出版されたのは1856年で、孤独に関する詩集だった。ドジソンは知己に恵まれ、友人のなかには評論家で作家のジョン・ラスキンや、画家で詩人のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティがいた。キャロルはまた著名な写真家でもあり、詩人アルフレッド・テニスンや舞台女優エレン・テリー、そして多くの子供たちの写真を撮影した。1898年に、重いインフルエンザの果てに気管支炎にかかり、65歳で死去した。そのときすでに『不思議の国のアリス』はイギリスで最も人気のある児童文学となっていて、ヴィクトリア女王もファンのひとりだった。

ほかの主要作品

1871年 『鏡の国のアリス』

1876年 『スナーク狩り』

もっと知りたい読者のために

『デカメロン』 (1353年)ジョヴァンニ・ボッカッチョ

杵物語の構造を持つ『デカメロン』は、イタリアの作家、詩人で、学者でもあるジョヴァンニ・ボッカッチョ(1313年〜75年)が書いた100篇の物語集である。個々の話をまとめる杵になる物語は、女7人男3人の若者10人が、疫病の蔓延するフィレンツェを逃れてフィエーゾレにほど近い魅惑的な邸宅で過ごす、というものである。一同は毎日全員がひとつずつ話をすると決め、そのようにして10日間にわたって100話が語られる。その日の座長に指名される者が題目を選び、語られる話に向けての約束事を取り決める。毎日締めくくりにだれかがカンツォーネ(歌)を歌い、ほかの者は踊る。こうして精妙に書かれたためくるめく物語集ができあがり、悲劇の愛の物語やみだらな話から、人間の意志の力の話や女が男に仕掛ける計略の話に至るまでが集まった。これはルネサンス期とそれ以降の作家に刺激を与えた。

“
接吻されても色艶消えぬ、
女の唇、春の宵、
月がのぼればまた光る。
『デカメロン』
ジョヴァンニ・ボッカッチョ

”

『ガウェイン卿と 緑の騎士』 (1375年ごろ)

2,500行ほどで構成される『ガウェイン卿と緑の騎士』は、中英語の頭韻詩の例として非常によく知られている。作者不詳の、騎士道冒険譚の詩であり、舞台は伝説のアーサー王を頂く宮廷の初期に置かれている。美麗に綴られた魔法の物語は心理的洞察に満ち、英雄ガウェイン卿が謎めいた緑の騎士と出会ってからつぎつぎと直面する試練と誘惑を詩の形で語っている。

『井筒』 (1430年ごろ) 世阿弥元清

作者の世阿弥元清(1363年〜1443年)は日本を代表する能作者であり、能楽芸論の大家でもある。この曲の題名は井戸のまわりの囲い杵に由来し、曲全体は僧侶と里の女が出会って、女が僧に話を語るという杵構造になっている。ある男と女が幼いころ井戸で遊び、互いに惹かれて結婚する、という物語(『伊勢物語』の挿話)がもとにある。

『アーサー王の死』 (1485年) トマス・マロリー

1485年にウィリアム・キャクストンによって印刷されたが、それより早い稿本版は1470年ごろから存在していた。これは伝説のアーサー王と円卓の騎士たちの物語の集大成である。フランス中世騎士物語を

“
むき出しの美しい剣が
尖端だけ突き刺さっていた……
この石と鉄床よりこの剣を
引き抜いた者は、全イングランドの
正統なる王として生まれた者だ。
『アーサー王の死』
トマス・マロリー

”

もとに英語の散文に翻訳して編集したのは、騎士にして兵士、作家、イングランド議会の議員であったトマス・マロリーである。マロリーは物語を年代順に配列して、アーサー王の誕生からはじめ、騎士たちの友愛話を中心にまとめあげた。

『アマディス・デ・ガウラ』 (1508年) ガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボ

モンタルボ(1450年ごろ〜1504年)がスペイン語で記した散文の騎士道物語『アマディス・デ・ガウラ』が生まれたのはおそらく14世紀前半だが、最初に書かれた正確な時期や作者は不明である。4巻に及ぶモンタルボ版は、端正にして勇敢で心やさしい騎士アマディスの伝説とオリアナ姫への愛を語っている。アマディスは姫に尽くして騎士道の冒険に臨み、巨人や怪物を相手に恐れを知らぬ手柄を立てる。この作品の気高い理想や勇壮さや情感は、中世騎士物語の模範となった。

〈旅船〉3部作 (1516年、1518年、1519年) ジル・ヴィセンテ

〈旅船(バルカス)〉3部作は、「ポルトガル演劇の父」と呼ばれる劇作家ジル・ヴィセンテ(1465年ごろ〜1573年)による宗教劇である。1幕劇3部で構成され、『地獄への旅船』、『煉獄への旅船』、『天国への旅船』から成る。風刺と寓意を帯びたこの3部作は、ヴィセンテの卓越した劇作の頂点とされるものであり、あらゆる階級を反映する船客たちを登場させ、その大半が天国にはいるうとして不首尾に終わるさまを描いている。

『ウズ・ルジアダス』 (1572年) ルイス・デ・カモンイス

『ウズ・ルジアダス』は10歌から成る叙事詩であり、大詩人デ・カモンイス(1524年〜80年)がヴァスコ・ダ・ガマのインド航路遠征を順にたどって物語った作品である。導入部のあと、川の精への祈願と、国王セバ스티アンへの献辞が終わると、つぎつぎと登場する語り手によって言辞が格調高く雄弁に語られる。ガマによってポルトガルの歴史が語られる個所もあれば、冒険や嵐、さらにはギリシャとローマの神々による干渉の描写もある。作品全体がポルトガル人とその偉業への賛歌となっている。

『妖精の女王』 (1590年、1596年) エドモンド・スペンサー

イギリスの詩人スペンサー(1552年ごろ〜99年)の代表作である『妖精の女王』は、宗教的、道徳的、政治的寓意をこめた作

品である。舞台となる伝説のアーサー王の世界は、チューダー朝のイングランドを象徴している。全6巻で構成され、巻ごとにひとりの騎士の偉業が語られて、それぞれの騎士が貞節などの道徳的美点を表している。騎士たちは妖精の女王グロリアーナに仕えるが、これは女王エリザベス1世を想起させる。スペンサーは12巻にする構想をいっていたが、46歳にして死を迎え、完結を果たさなかった。

『ル・シッド』 (1637年) ピエール・コルネイユ

5幕から成る韻文悲劇『ル・シッド』は、フランスの悲劇作家ピエール・コルネイユ(1606年〜84年)の作品であり、フランス新古典主義悲劇の代表例と見なされている。スペインの国民的英雄エル・シッドの物語に着想を得たこの作品は、ル・シッドが頭角を現す話と、未来の義父に対して決闘を申し入れる話を語っている。決闘に臨んで主人公は、愛する女と家の名誉のどちらをとるかの選択を強いられる。

ジョン・ミルトン

イギリスの詩人ジョン・ミルトンの名を最も世に知らしめた『失樂園』は、英語で書かれた叙事詩の最高傑作と見なされている。ミルトンは1608年にロンドンのチープサイドで生まれ、まだ学生のころから執筆活動をはじめた。しかし、1642年に国内で大内乱が勃発すると革命を支持する政治活動に身を投じ、小冊子を作って宗教と市民の自由を擁護した。1649年にチャールズ1世が処刑されてイ

『失樂園』 (1667年) ジョン・ミルトン

ミルトンの最高傑作であり、リズムと響きの至高の偉業である叙事詩『失樂園』は、聖書にある物語に基づいて、アダムとイヴが転落し、それゆえ全人類が神の恩寵を失ったと歌う。1674年の最終版で12巻(初版では10巻)構成になったこの詩は、ふたつの主題をからみ合わせている。ひとつは神と天国に対する悪魔の反逆であり、もうひとつはアダムとイヴが受けた誘惑とエデンの園からの追放である。

『フェードル』 (1677年) ジャン・ラシーヌ

フランスの劇作家ジャン・ラシーヌ(1639年〜99年)が書いた感動的な悲劇『フェードル』は、フランス新古典主義を代表する傑作である。5幕から成る韻文劇で、ギリシャ神話からとったその題材は、古典時代の劇作家エウリピデスとセネカがすでに作品にしていた。ラシーヌ

ギリス王政が倒されたのを受け、ミルトンは国務会議の書記官になった。1654年までには完全失明したが、詩や文章を助手に口述して執筆活動をつづけた。1660年の王政復古を受けて、代表作の数々を創作することに専念した。1674年にロンドンで65歳の生涯を終えた。

主要作品

1644年『アレオバジティカ、言論の自由論』
1667年『失樂園』(上記参照)
1671年『復樂園』
1671年『闘士サムソン』